



世界の音楽祭・トップ5〈第1位〉

ザルツブルク音楽祭 Salzburger Festspiele

文＝中東生
Text＝Shinobu Naka

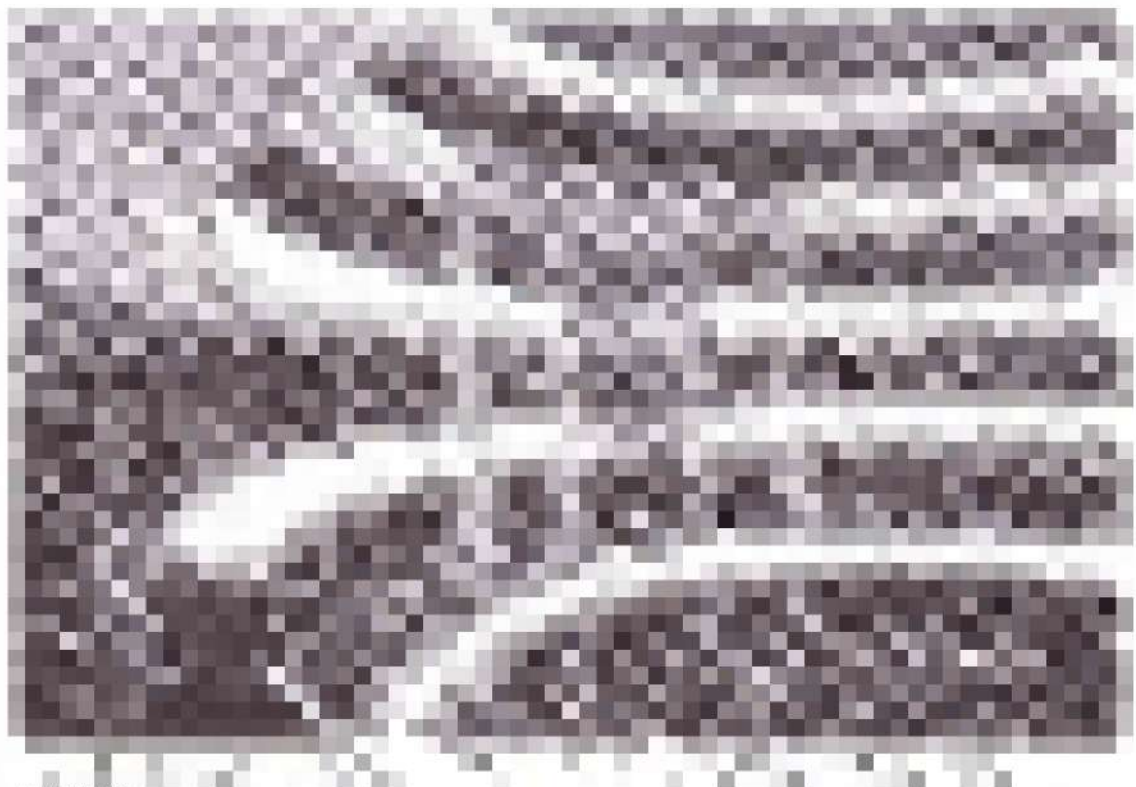
特別な高級感を持つ名門音楽祭

今回のアンケートで堂々第1位に輝い

たザルツブルク音楽祭は、来年100周年を迎えることもあり、クライマックスに向かって年々活気を増している。しか

し、その歴史は少々複雑なので、何をもって100周年と数えるかを再認識する必要はある。この音楽祭の前身は184

2年、モーツァルトの記念碑除幕のため、依頼を受けた末息子のフランツ・クサーヴァー・モーツァルトが父親の作品



© Wilhelm Floss

をアレンジして演奏したモーツァルト音楽祭である。1856年にはモーツァルト生誕100年記念音楽祭として開催され、1887年には、まさに和訳通りのザルツブルク音楽祭 (Musikfest) となったが、第一次世界大戦で中断されたため、戦後の1920年に、第1回ザルツブルク音楽祭 (Festspiel) が、ホフマンスタールの演劇「イーダーマン」上演のみで始まったのを起点として、100周年という概念なのである。

実は私自身もザルツブルク音楽祭を第1位に選んだのだが、その決め手は「特別感」だったように思う。素晴らしい音楽祭は他にもある。作曲家ゆかりの地の音楽祭もここだけではない。それでもやはりザルツブルク音楽祭がトップに君臨するのは、クラシック音楽に適したクラシカルな景色と、音楽祭に集中できるのに生活もしやすい街の大きさと近郊、そして特別なイベントとしてのセレブ感が格別なのだろう。毎日開演時間が近くと、タキシードやイヴニング・ドレスで闊歩する姿がここまで自然に受け入れられるのは、ザルツブルクくらいではないだろうか。

音楽祭サイドはどのように解釈してい



クルレンツィス(右)と演出家のピーター・セラース。今年はこのコンビでモーツァルト《イドメネオ》に挑む ©Salzburger Festspiele / Anne Zeuner

るのか質問してみると、「他の音楽祭に比べて芸術的に広い選択肢があること」、「音楽祭の観客がバカンスとセットで芸術を堪能しに来ること」、「バロック様式の旧市街が既に音楽祭の舞台となっていること」という3つの答えが返ってきて、前述の感想と合致した。

さらに付け加えると、毎年1月のモーツァルト週間、春の復活祭音楽祭、そして初夏の精霊降臨祭音楽祭と続く「助走」がいやおうなく期待感を膨らませ、夏の音楽祭に突入するという体制も効奏しているだろう。

今年もクルレンツィスと ネトレプロコが目玉

さて今年のザルツブルク音楽祭は、初

■ Information & Pick up

クルレンツィス指揮 SWR 交響楽団
〈日時〉7月26日20時30分〈会場〉祝祭大劇場
〈曲目〉ショスタコヴィチ「交響曲第7番〈レニングラード〉」

モーツァルト《イドメネオ》
〈日時〉7月27日18時/8月2日18時30分/6日18時30分/9日18時30分/12日16時/15日15時/19日18時30分〈会場〉フェルゼンライトシュレー〈指揮〉テオドール・クルレンツィス〈演出〉ピーター・セラース〈出演〉ラッセル・トーマス(イドメネオ)、ポーラ・ムリヒー(イダメンテ)、イン・ファン(イリア)、ニコル・シュヴァリエ(エレットラ)、他〈管弦楽〉ムジカエテルナ

ケルビーニ《メデア》
〈日時〉7月30日18時/8月4日19時/7日18時30分/10日20時/16日19時/19日19時〈会場〉祝祭大劇場〈指揮〉トーマス・ヘンゲルブロック〈演出〉サイモン・ストー〈出演〉ソーニャ・ヨンチェヴァ(メデア)、パヴェル・チェルノフ(ジャゾーネ)、他〈管弦楽〉ウィーン・フィル

オッフエンバック《天国と地獄》
〈日時〉8月14日15時/17日15時/21日15時/23日19時30分/26日19時/30日19時〈会場〉モーツァルトハウス〈指揮〉エンリケ・マツォーラ〈演出〉バリー・コスキー〈出演〉ホエル・プリエト(オルフェ)、キャスリン・レヴェク(エウリディーチェ)、マルセル・ピークマン・アリストテ(プルトン)、マルティン・ウィンクラー(ジュピター)、他〈管弦楽〉ウィーン・フィル

チケット

Ticket Office Salzburger Festspiele
Herbert-von-Karajan-Platz 11
5020 Salzburg, Austria
Tel: +43 662 8045 500 / Fax: +43 (662) 8045 555
E-Mail: info@salzburgfestival.at
https://www.salzburgerfestspiele.at/

輝かせている。

来日したばかりのテオドール・クルレンツィスが2つの異なるオーケストラを連れて登場する。共に来日したムジカエテルナとは3年連続出演で、2017年のザルツブルク音楽祭デビュー演目モーツァルト《皇帝ティートの慈悲》と同じく、ピーター・セラースが演出するモーツァルト《イドメネオ》がオーブニングを飾る。2年目の去年は、インテンダントのマルクス・ヒンターホイザーがテオドール・クルレンツィスを「口説き落とす」と実現したベートーヴェン交響曲全曲演奏だった。クルレンツィスは後に「相当キツかったので暫くはやりたくない」と吐露していたが、ヒンターホイザーは毎公演満足気だ。5回目の最終公演翌日、クルレンツィスがザルツブルクを去る前に急遽面会を申し込み、確約を取り付けた目玉公演だ。もう一つのオーケストラは、2018年9月にクルレンツィスが首席指揮者に就任したSWR放送交響楽団で、彼らのザルツブルク音楽祭デビューとなることから、団員たちも目を

当音楽祭の常連アンナ・ネトレプロコは、夫のユシフ・エイヴァゾフとチレア《アドリアーナ・ルクヴール》を演奏会形式で歌う。この演目は、バーデン・バーデン祝祭劇場で昨年の夏の目玉公演となるはずであったが、病気のためにキャンセルとなったこともあり、早いうちから既に売り切れている。

その他、ソーニャ・ヨンチェヴァ主演のケルビーニ《メデア》、精霊降臨祭音楽祭の再演となるバルトリとジャルスキーのヘンデル《アルチーナ》、そして注目の演出家バリー・コスキーの当音楽祭デビューとなる、オッフエンバック《天国と地獄》も楽しみだ。

レギュラー・オーケストラのウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に、常連のバイエルン放送交響楽団やベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、歌曲の夕べも……紙面が足りないので泣く泣く筆を置くことにする。